対句論から見た中国と日本の漢詩

流水対の運用を中心に

顧　姍姍

漢詩という文学様式は、中国に源を発し、日本の伝統文学である和歌とは異なるものである。しかし、七世紀からの遣隋・遣唐使を初めとした、盛んな中日文化交流を背景として、漢詩は、日本においても開花してきた。こうした両国の古人が共に創作した文学様式は、中日文学を比較する際に重要な手掛りだと思われる。

漢詩の格式作法においては、「対句」が重要な表現法である。それは、近体詩の成熟につれて、いろいろなバリエーションが現われてきた。その中で、より複雑で、高次な対句形式の一つとして、流水対が挙げられる。流水対は「流水」と「対」から成った複合語で、上・下句の意味が流水のようにつながっている対句のことを表す。流水対は、通常の対句と異なり、上下句の内容が並立的な関係にあるのでなく、多様な論理関係で結ばれ、緊密に一体となったものである。対句の表現法においては特別な存在だと見なされており、中国では研究者の注目を浴びてきた。一方、日本漢詩文学に目を向けると、奈良時代と平安前期における流水対を課題とした研究は、殆ど見当たらない。本発表では、これらを踏まえ、流水対の運用という観点から、奈良・平安前期の日本漢文学を考察の対象にし、中日古代の詩学の関わりを考えてみた。

研究方法としては、まず古代の詩学理論書を紐解いて、中国の流水対に関する幾つかの記述を基にし、流水対の定義、性格、その運用の実態を明らかにしてみた。流水対の形成は、近体詩が成熟してゆく過程と深く関わり、詩人が対句表現に新たな変化を求めていることが基盤となっていると考えられる。

この上で、日本での流水対の運用を考察すべく、奈良時代を代表する『懐風藻』（日本最古の漢詩集。751 年）、平安前期の九世紀の前半を代表する『文華秀麗集』（818 年）、また九世紀後半を代表する『田氏家集』『菅家文草・後集』を対象にし、時代を追って分析した。

この結果、

① 奈良時代には流水対の詩句が一例もなく、平安前期に下り、次第に運用されるようになったこと。

② 同じ平安前期でも、九世紀前半と後半の日本漢詩は、流水対の運用には、歴然した差が表われていること

が明らかになった。

これらのことを、日本漢詩文学史における近体詩の形成と展開をあわせて考えてみると、流水対は、近体詩が形成し増加していく過程で、質的な変化（無から有）、量的な変化（少数から多数）を辿ったことがわかる。さらに、流水対の運用は、日本漢詩の対句表現にバリエーションをもたらし、近体詩の作法をより成熟させたものである、と平安前期の漢詩文学史において位置付けられる。以上は、中国漢詩文学史での流水対の形成、展開と同じような傾向を示していると考えられる。